

連載 エッセイ

No. 22

ふひょう いちどう
浮萍 一道 開く

- NPO法人ホップ
障害者地域生活支援センター

代表理事 竹田 保

最近、私は電動車いすを使用して山形市へ旅をした。その中でさまざまな課題や新たな発見があった。飛行機、タクシー、新幹線を駆使しての東京経由、山形までの旅行。今回の旅で、改めて感じたことや気づかされたことがあった。本来なら、札幌から山形までの距離を短時間で移動するためには、飛行機の直行便を選ぶのが合理的な選択だと思う。丘珠空港から山形空港までは直行便なら、1時間15分で行くことができ、自宅からも空港まで、車で30分もかからないで行くこともできる。

しかし、電動車いす利用するとなると、地方都市間の航空機は小型であり、電動車いすを手荷物として預ける際にはバッテリーチェックや車いすの大きさに関する課題が待ち受けている。また、小型機の場合は搭乗口から飛行機の入口に繋がる搭乗橋ではなく、地上から小型移動リフトを利用することもある。私のような体幹保持が不安定な障がい者には難しい課題が多々ある。そのため、今回の旅行では直行便の選択をせず、別の方法で目的地に向かうことを決断した。

札幌から新千歳空港まで車で移動し、新千歳空港から羽田空港まで航空機を利用、羽田空港到着から東京駅までは、福祉タクシーを利用した。自宅から東京駅到着まで、待ち時間を含めて6時間程度となった。羽田空港から東京駅までモノレールとJRを利用する方法も考えたが、JR係員による乗換時間と今回は手荷物、何よりも電動車いすのバッテリー消費を考慮して、タクシーを利用することにした。山形での交通機関がバリアフリーとなっていないため、少々遠回りをしなければならない状況だった。この遠回りは、通常の旅行者には理解できないストレスや制約をもたらしたが、同時に新たな視点を提供してくれた。

新幹線に乗り換える際も、電動車いすの制約は依然として続いた。新幹線の車内は狭く、プラットフォームと車両との段差のため、JRスタッフの協力が不可欠で、スムーズな移動は難しかった。しかし、新幹線の窓から広がる景色を楽しむことができ、特に夜間に新幹線を利用した際、夜景を眺めながらビールを楽しむという贅沢な瞬間を堪能できた。これらの小さな幸せが、制約を忘れさせ、旅行の楽しみを再確認させてくれた。

山形に到着すると、地元の文化や食事を楽しむ機会があり、駅弁や郷土料理の芋煮を味わい、地域の特産品に触れることで、旅の魅力がさらに広がり、地元の人々と交流する機会も持ち、新たな友人を作ることができた。これらの体験は、制約や課題を忘れ、旅行の本当の意味を思い出させてくれた。

この旅を通じて感じたことの一つは、バリアフリー旅行の重要性だ。電動車いすを使用する人々が、快適に旅を楽しむためのアクセシビリティが整っているかどうかは、社会の包括性の一環として考えるべき重要な問題だ。制約に立ち向かいながらも、新たな冒険を楽しむことができることは、私たちにとって貴重な体験だと思う。

また、この旅を通じて、地方都市間のアクセスにおける課題を痛切に感じた。地域の交通機関や施設にバリアがあることは、地方都市へのアクセスを難しくし、人々に不便を強いている。これらの問題に対処し、アクセシビリティを高める努力が、多くの人々にとって旅行をより楽しいものにするのではないかと思う。

旅を通じて、制約に立ち向かうチャンスや新たな視点を楽しむことの重要性を再確認した。旅は、挑戦と発見の旅であり、私たちにとって不便や制約が新鮮な感覚を提供してくれる。そして、地元の文化や食事を楽しむことは、旅をさらに豊かな体験に変える要素となる。制約に立ち向かいながら、新たな冒険に挑戦し続けることで、私たちはより豊かな人生を築いていける。誰もが気軽に旅に出かけて行けるようになって欲しいと思う。